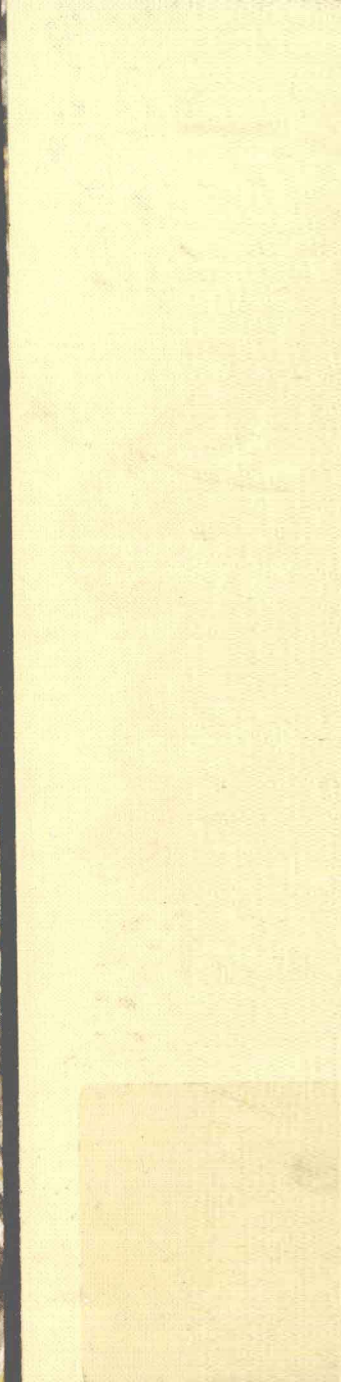




現代隨想全集

4

阿部次郎
天野貞祐
集

刊 社 元 創

現代隨想全集
第四卷

昭和二十九年二月十日 發行

定價 三八〇圓

著 者 阿 野 次 祐 郎

發行者 小 林 茂
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

印刷者 田 中 末 吉
東京都新宿區改代町二四

發行所 株式會社 創 元 社
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
(大 阪 市 北 區 繩 上 町 四 五)
電話茅場町一七三四・二〇六四・四〇八三
振替 東京 一五六五・大阪 五七〇九九

印刷 理想社 製本 小高

萬一落丁亂丁本がありましたら取替へます

現代隨想全集
第四卷

目
次

阿部次郎集

フォレレを喰つた話	九
早春記	一六
ルツェルンの春	二六
埃及紀行	三三
人生に於ける藝術の位置	九
ゲーテの『詩と眞實』について	二八
讀書の回顧	三三
ケーベル先生の言葉	三七

深 穩 一五

ゲーテへの感謝 一五四

昭和二年日記抄 一六

丙戌日記抄（一） 一八

丙戌日記抄（二） 一九

丙戌日記抄（三） 二〇

年 譜 二〇八

解説 二五
井上政次

天野貞祐集

人生の道	二三
私の人生観	二三〇
人間の哀しみ	二三四
道理について	二五〇
徳育について	二六六
勤勞のよろこびに就いて	二八二
ヒューマニズムについて	三〇一
自由について	三一二
幸福への道	三三七

時間の審判	三六
神と人との仕える道	三二
読書論	三六
読書と思考について	三五
自覺と反省	三六
文化と教養	三七
カントの魅力	三七
秀才論	三三
わたしの少年時代	四〇五
私の歩んだ道	四〇
野球と私	四八

内村鑑三先生のこと (一)	四九
内村鑑三先生のこと (二)	四六
岩元先生の追憶	四二
九鬼君のこと	四五
濱田耕作先生のこと	四六
年譜	四四
解説	四九
	大島康正

阿部次郎集

フォレレを喰つた話

上

獨逸語で Forelle と呼ぶ魚がある。日本語に譯して何に當るかは知らない。いづれは鮭科に屬するものであらうが、日本の川鱒よりは小さくて、身もあんなに紅くはない。身の紅くない點において、それは北海道の支笏湖などで養殖してゐる姫鱒とも違ふやうである。多分ヤマメやイハナに従姉妹ぐらゐな關係になつてゐるのであらう。この魚が獨逸人のあひだに特別の親しみを持たれてゐることは、シューバートの小曲「フォレレ」を知つてゐる人達には珍らしくもないことである――

澄みとほる小川に

嬉しげな迅さで

氣まぐれなフォレレが

箭のやうに射過ぎた……

私が今ここに書かうとするのは、千九百二十三年の正月、瑞西のベルンでこのフォレレを喰つた話

である。

千九百二十二年の夏も末に近く、私は伯林の喧騒を逃れて、西南獨逸の大學都市ハイデルベルクに半年の居を定めた。この町は、ネッカールの河が、半ば山川の性質を帯びつつ、兩岸の山を割つて、ラインの平野に流れ出る最後の溪谷に位置を占めてゐるのである。かつて其處の大學から東京帝國大學に聘せられて經濟學を講じてゐたレーテラー氏は、仙臺の大學をベビー・ハイデルベルクと呼んだが、それは大學の歴史については正當であつても、地形については必ずしも當らない。西曆十四世紀に既に創設せられて、十六七世紀に榮え、今より百餘年前にヘーゲルのやうな碩學を教授として持つてゐた其處の大學に比べれば、仙臺のそれはいふまでもなくベビーであるが、地勢からいへば仙臺は寧ろ伊太利のフィレンツェに比較せらるべき大きさを持つ。ハイデルベルクの溪谷を仕切る兩岸の山は、仙臺の郊外にある丘陵よりもつと高く、樹木が繁つて、河に迫つてゐる。その町は仙臺やフィレンツェのやうに、一面に山を受けて、一方に野を控へた廣濶の地形を持つのではなく、平野に近く置かれてはゐるが、町そのものはなほ純然たる溪谷である。従つてそれは仙臺やフィレンツェのやうに横に發展する可能性を持たず、僅かに前に押し出す將來を持ち得るだけである。この意味からいへばハイデルベルクこそ都市としては永遠のベビーであり、大學都市及び遊覽地としてその小さい存在を保持し行くべき運命を擔ふものといふべきであらう。仙臺が將來にわたつて發展しなかつたら、それは人間の懶惰が責任を負はなければならぬ。ハイデルベルクが近代都市として發達し得ないのは、自然が豫め定めてゐるのである。ネッカール河に沿ふ發展は、マンハイムから溯ることであつて、ハイデルベルクから降ることではない。しかしハイデルベルクは、それだけに永遠の小人として特殊のうつくしさを持つ。この町は、いはばその能樂的存在を長く歐羅巴の中に保つて行くであらう。たと

ひ溪流に近い川が丘陵地帯を出外れるところに位置を占めてゐる點において、兩者のあひだに確かに一致があるとはいつても、この町を想像するための比較の對象として、仙臺はあまりに大きすぎる。寧ろ人は、箱根の湯本塔の澤の邊の地勢を、早川をもつと廣くなだらかにし、兩岸の山をもつと左右に押しひろげ、宮ノ下のにぼる坂道をもつと押しつぶして考へてみるべきである。實際私が下宿してゐたS氏の家——古城山の山腹——からの眺望は、塔の澤の環翠樓を思ひ出させるところがあつた。轉居の報知が日本に居いて、日本からまたその返事が来る頃はもう秋も半ばであつた。外國にゐて特にまたれるものは故國の消息である。私は一週一度の郵便日を待ちかねてゐたが、或る日届いた家族や友人からの一束の手紙の中に、當時横濱にゐたK君からの消息も交つてゐた。さうして私のフォレレを喰ふ話は、そのK君の手紙に端緒を發するのである。

中

ケーベル先生のこととは今更こと新しく紹介するまでもないであらう。先生は人格的にいつて、當時東京の文科大學に學んだ學生の瞻仰の的であつたが、幾度か繼續された任期もみちて、つひに故國獨逸に歸らうとされたのは、不幸にして歐羅巴戰爭の途中であつた。國籍を露西亞に持ち、故郷を獨逸に有する先生は、佛蘭西を経由して獨逸に歸住することを、當時のこんがらかつた國際事情によつて許されなかつたために、望郷の念を抑へて横濱の露西亞領事館の一室に滯留しなければならなかつた。さうして先生にしたがつて横濱に移り、最後まで先生の薫化を受け、先生の餘生のお世話したのは、即ちあの手紙のK君であつたのである。先生は若い時分にハイデルベルクの大學に學び、クロー・フィッシャーの講義を聽かれた人である。私が今その地に遊んで古城の近くに住んでゐること

をきいて、先生はその時代のことをなつかしく思ひ出されたのであらう。K君の手紙には先生の二つの傳言が書いてあつた。一つにはネッカルを溯つた山間の小驛ネッカルゲミュンドに、希臘の酒を飲ませるところがある、それを飲みに行つて御覽。二つにはお前の下宿の近所のラルフスブルンに、フォレを喰はせるところがある、それを食べに行くがいい。丁度散歩にふさはしい秋の半ばに、先生のこの傳言を受取つて、私は先生のためにもこの二つのことを果さうと思つた。この二つを果したことを横濱に報告して、老齡にして未だ故郷の土を踏みかねてゐる先生をよろこばしてあげたいと思つた。そのうちの一つ、ネッカルゲミュンドに希臘の葡萄酒を飲むことを、私は間もなく果すことができた。當時の日記をあけて見ると、次のやうに書いてある。――

「十月二十二日。朝から秋晴れのうつくしい天氣だつた。I君に誘はれて遠足に出かける。登山電車でケーニヒスシュツールまで登つて其處から歩き出した。コールホーフの牧場のあひだをぬけて、黄葉の散りしいた林の中を通り、小さい谷川添ひに歩いて行く道は、まるで日本の片田舎のやうである。奥深くはないが、綺麗で豊かな心持がある。山中の小村を抜けてバンメンタールへ出たが、汽車にはまだ大分間があるので、ネッカルゲミュンドを指して歩いて行つた。左手黄葉の正にたけなはな山で、右側は緩傾斜の草地である。手入れの届いた、溫秀な斜面をたどつて、丘の巔を見あげると、そこには部落があつたり古城址があつたりする。秋の日の冷い、さはやかな空氣を顔に感じながら歩いて行くうちに、ゲーテの詩の中の「漂泊者」のやうな氣持にもなり、『キルヘルム・マイスター』の中の或る場面にあるやうな氣持にもなる。このうつくしい自然の中にゐて、人間の不幸なのが不思議である。ネッカルゲミュンドにたどり着いて、新しい方のレストーランにはひつて希臘の酒をのんだ。大變甘いといふ話なので半甘をあつらへたが、旗亭の主人のいふところによれば、ナク

ソスの葡萄は糖分が多くてそれが醗酵し盡すわけに行かないため、甘さが残るのださうだ。従つて甘いと同時にアルコールも強いのださうだ。半甘を飲むとポートワインのやうな味がするが、その甘味は自然で清爽である。Iが殆んど飲まないの、僕一人で一本を飲みほして、やや酔を覺えた。電車に乗つて、夕陽の美しく河向うの山の巔を照してゐるのを見ながら宿に歸つたのは、もう四時であつた……かくて一方の報告材料は容易に出來上つた。しかしフォレレの方はさう簡單には行かなかつた。もう親友になりきつてゐた宿主のS氏にたづねて、アルフスブルンネンのその魚料理屋の所在はわかつたが、そこは戦後の甚しい不況のため料理を休んでゐて、もう學生行樂の地ではなかつた。かくて私のフォレレの話にはS氏が登場する順番なのである。

下

S氏のことは書き出せば數限りもない。彼は透き徹つて善良な魂を持つた五十男であつた。しかし彼の善良さが幾度か利用され蹂躪された結果、彼は人間嫌ひになつて、今はその相應に廣い庭園の土いぢりに日を送る農人となつてゐた。彼の遣り場のない善良さは、その生涯の最後に、異邦人の私に向つてそがれた。私が彼の善良さを利用せずに、ただこれを愛しこれを尊重することを發見した刹那から、彼の鬱屈してゐた友情は偏に私の方に溢れながら流れ出して來た。さうしてフォレレの問題もまた彼の友情を證明する生きた證據となつたのである。

私は「その生涯の最後に」といふ。それは彼が、私のまだ其處に下宿してゐるうちに死んだからである。最初に入院するときは、ただ普通の盲腸炎で、きればすぐになほるつもりで氣輕にこれを玄關まで見送つたのだつた。玄關で堅く握手してわかれる私達を傍で見ながら、女中のレンヒェンは「貴

君方は半分^{ハーフ・ブライド}戀人のやうだ」といつてひやかしたが、これが最後の握手にならうとは、二人とも夢に

も思はなかつた。看護に行つてゐる彼の妻は歸るたびに彼の消息を傳へたが、病氣に危険がありさうにもなかつた。扉をノックする人があると、ヘア・プロフェッサー（彼は私をさう呼んでゐた）なら逢ふが、その他の人なら誰にも逢はないと彼はいつたさうだ。しかし私はいよいよ傷口に心配がなくなるまで、彼の安靜をみださぬつもりで一度も見舞ひに行かなかつた。そのうちに、病氣が盲腸ばかりではないことがわかつて二度目の手術をして、そのままに私の「戀人」は永久にこの世からとり去られてしまつたのである。それは十一月十日の夜であつた。さうして生きてゐる彼と私との最後の交渉は、彼が死ぬ前々夜に見たフォレレとりの夢であつた。

彼はその夜假睡の夢から醒めて、枕頭にすわつてゐる彼の妻にかういつて話をしたさうである——私に喰はせようと思つて、彼はフォレレをとりに河に飛び込んで行つたが、魚はつかまりさうになかなかつかまらない、捕へようとして焦つてゐるうちに何かに驚かされて彼の夢はさめた。これが瀕死の病人が私につくしてくれた最後の親切である。私はこの親切を自分が死ぬまで決して忘れないであらう。

しかし現實のフォレレは、獨逸を去るまで私の口にはひらかなかつた。千九百二十三年の正月四日午後、私は遂に彼の家をあとにして瑞西に向つた。雪ぐもりのバーゼルに一夜をあかして、共に伊太利に入るべき王子爵と落合ふために、翌五日は更にベルン行の汽車に身を託した。ベルンに泊ること三夜、その間にはなほ語るべきことがあるが、六日の晝、私は思ひがけずここで遂にフォレレにお目にかかることが出来た——今はこのことをいふだけに止める。

ベルンの町は廣瀬川のやうに曲りくねれるアールの河に貫かれた山間の都會であるが、アール河は